

懐かしい未来新聞

学術雑誌「地域福祉研究」取材受け入れ

新たな気づきと発展の機会に

9月16日、17日の2日間にわたり、日本生命済生会が刊行する学術雑誌「地域福祉研究」（下記※1）のなかでの「保健・福祉・医療の現場を訪ねる」といった特集記事に本市が選ばれ取材を受けました。本市の保健、医療、福祉のイチオシの事業を紹介しました。行政（健康福祉部の各課）の取り組みだけでなく、市を支える医療、福祉団体への取材もあり、現場での悩みや課題に対して、3名の取材陣（下記※2）からご助言をいただき、今後の業務や活動の参考となる機会を得ました。また、地域共生社会推進課が進める「いつのまにやら」の意味づけもご指導いただきました。（下図参照）

必要だ」と語られました。

本市の地域特性として、人口の偏在が大きく、訪問診療や在宅医療では移動時間が長くなること、また開業医の多くが市外在住であるため、緊急時の往診や看取りケアが進みにくいという課題があります。こうした中、同法人ではみなくち診療所において一次救急として、医師会会員および甲賀病院との連携のもと輪番制による休日診療を実施し、さらに在宅医療の推進に向けて夜間の待機体制を整備されています。

『医療』分野からは、令和6年4月より「みなくち診療所」の指定管理を担っている医療法人メディカル甲賀代表の今村陽一医師（甲賀湖南医師会副会長）にお話を伺いました。

みなくち診療所を拠点とした在宅医療の展望

取材は、今村医師の熱い言葉から始まりました。冒頭で「私は甲賀で生まれ育ち、これまで地域医療に身を置いてきた。これからの人生も地域に貢献していきたい」「高齢化が進み、医療アクセスが限られる住民を支えるには、行政と一体となった協力体制が

必要だ」と語られました。本市の地域特性として、人口の偏在が大きく、訪問診療や在宅医療では移動時間が長くなること、また開業医の多くが市外在住であるため、緊急時の往診や看取りケアが進みにくいという課題があります。こうした中、同法人ではみなくち診療所において一次救急として、医師会会員および甲賀病院との連携のもと輪番制による休日診療を実施し、さらに在宅医療の推進に向けて夜間の待機体制を整備されています。

また、今村医師からは、行政（市）に対して旧施設の活用やコーディネーターの継続配置などへの期待が示されました。取材の終盤では、取材陣からも在宅ホスピスや看取りの拠点として施設の短期入所などの地域資源を活用する案や、介護小規模・看護小規模に加え医療を包括した「医療小規模多機能型」のモデル構築などの提案が出され、終始和やかな雰囲気の中で取材は締めくくられました。

実効性のあ
重層的支援体制づくり

人福祉・動物福祉協議会より



▲田中ヒロヤさんのお店で協議会議の活動をしている様子

取材陣からは、「多頭飼育のケースを重層的支援へとつなげる優れた実践である」「いわゆる「ゴミ屋敷」の予防を目的とした高齢者支援と同様に、重層的支援の必要性を理解する上で最適な取組みだ」と高く評価されました。

※2 取材陣

黒田研二氏 西九州大学地域福祉学部教授、医師
牧里海治氏 関西学院大学名誉教授
渡辺晴子氏 神戸女子大学教授

取材陣からの感想

2日間、楽しい取材となりました。市における地域包括ケアや重層的支援体制整備事業などを自分たちの独自の仕組みにしていき、稀有な輝きを発していると

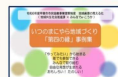
※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気づきから使われはじめた言葉です。

甲賀市発「いつのまにやら」の意味づけがすっきりと

指をくわえて待っているも、地域づくりが始まるというものではない

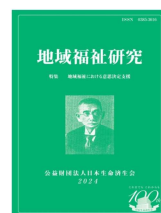
- ① 継続すること
- ② 変化を面白がること、変化を恐れない
(化学反応、瓢箪から駒...)
- ③ 認め合うこと
- ④ トライ&エラーを繰り返していること(岩永市長)

⑤ チームで取り組み、記録を残して、PDCAサイクルで動かし続けるのが、いつのまにやらのミソね。(神戸女子大学 渡辺晴子教授)



取材により
いただいた言葉

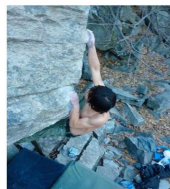
前号の専門雑誌
地域福祉研究



本号の内容
・「地域福祉研究」取材受け入れ
・複線人生のすゝめ
・重層物語 スイートメモリーズ 4

複線人生のすゝめ

一撃めざして何度もトライ



税務課

かみむらまさゆき

上村正幸 さん

これと言って自慢できるものや、夢中になれるものもないままに高校時代は山岳部に入りました。

そこでクライミングの一種であるボルダリングにはまって、今年で20年になります。とはいえ、それだけを一途にやっているのではなく寄り道も多いんです。簿記2級を取得し、次は税理士を目指したいし、たまに自転車で走りたくなるし、ジビエにも興味があります。それでも、岩や壁はずっと動かないのでそこにあるので、結局、僕自身のよりどころになっている感じです。

クライミングでは、岩壁に登る息を整える孤独や、岩をつかんだ時の筋肉の動き、重力に逆らう躍動感、次の途を探す計算力など、魅力を言えばキリがありません。でもやっぱり「一撃」に憧れます。最初のトライで完全に登り切ることをそう呼ぶのです。「一撃」するために、いつもの見慣れた壁に何度もトライするんです。皆であれこれと共有しながら登ると本当に楽しいですよ。一緒にトライする仲間、募集中です。

※1 学術雑誌「地域福祉研究」

公益財団法人 日本生命済生会の書籍化活動の一つである。地域福祉概念の明確化と理論の深化、地域福祉の向上のために年に1回発行される専門誌。今回の取材が掲載された号は、年明けに発行予定。

重層物語

スウィート・メモリーズ 4

「……共同体とは、なんぞや」
それが、松田民生委員と大村自治会長に宛てた柀さんの遺言だった。

「その意味ってのが、分かりそうで分らんのや」

松田さんは、腕を組みながら神秘的な面持ちで言った。

「なるほど、今回のプランにはその謎を解きたいという目論見があるんですね」

私はそう言いつつ、またもや上手く乗せられてしまったと気がついて、少し抵抗して見せようと質問を続けた。

「しかしですよ。個人的な興味関心があるからといって、柀透子さんのプライバシーへの配慮を怠るってよいものではありません。それに、正式な遺言ではなく口約束でしょう」

意地悪がしたいのではない、つまり、松田プランが失敗した時の言い訳を集めているというか、もしもの時に説明に耐えるだけの根拠を用意したいのだ。

「北島君ええか、ワシが自分の直感が全てやとは思ってへん。ただな、大事な局面やおもたら、やるしかないんや。そういうアンテナは信じたらなあかん。遺言もそや、口約束やったら信用ならんのか、公正証書を見せなあかんか。ワシとあんたの関係において、目の前のワシより、証書一枚をあんたは信用するんか」

信用とは何か……。私は、金融機関の窓口で知り合い同士が、わざわざ身分証明書を取り交わしている場面を浮かべながら、松田さんの言葉を反芻していた。

「今、信用取引の真髓を理解したような気がします」

「そうか、わかってくれるか、北島くん」

「ともに夢を叶えましょう」

松田邸の玄関で私たちはきつく抱き合った。

すると奥の方から、大きなラジカセを右肩に担いだ大村自治会長が、満足げな笑みを浮かべてゆっくり歩み寄ってきた。

「おいおい、お気に入りのナンバーを流してしまえばよかったよ。クライマックスにはまだ早いんじゃないか、お二人さんよう」

大村さんは銀幕のスターを思わせる声で言った。

「これで役者が揃ったというわけだ。さあ、作戦会議といこうじゃないか」

客人として迎えられ、靴を脱いで一歩足を踏み入れた瞬間、かつてこの家が賑やかだった頃の気配が伝わってきた。所狭しと走り回る子どもたちの足音、縁側から響く酔っ払いのいびき、台所でさやかれる愚痴と笑い声、彼らが興隆した時代の息づかいが……。

「ああ、あつちの部屋や。仏さんのとこでやろか」

少し後から聞こえた松田さんの声にふと我に返った。

作戦会議は仏間で行われた。簡素な仏壇には、六十代半ばくらいの上品な女性の写真が置いてある。

（ああ、そうか。たしか松田さんはお一人暮らしだったな）

男の一人暮らしの割にと言っては失礼だが、室内の掃除は行き届いていて、なにもかもが収まるべき場所にきちんと収まっている。それはどこか無機質な生活を彷彿とさせ、寂寥の感が迫ってくる。家族の写真や作品といった思い出もなく、花やテールクロスなどの彩りもない香りや匂いもない。期待された役割を従順にこなす無数の道具だけが、使われるその時を静かに伺っている。

ゆえに、亡き奥様の微笑みと線香の残り香が哀しく強調されていた。

「べっぴんさんやろ」

無意識に遺影を見つめていたのだろつ、松田さんが声をかけてきた。

「もう五年になるかなあ。おかけさんでワシも大村さんも独居老人やらしもつてます」

松田さんは、奥さんの写真に向かつて、拗ねた子どものように言った。

「いやあ、僕の奥様はまだまだ元気いづいだよ。でもねえ、元奥様なんだよ」

大村さんは「お手上げさ」とばかりにジェスチャーを交えて言った。

「昔は皆でここに集まっつてなあ、この机とあつちの居間のこたつをつなげてやな、それでも誰かはみ出して、猫みたいに床でめし食べつたからなあ」

松田さんが、ボールペンをカチッと鳴らして言った。

「今は独りだからねえ、机の上に寝転んで食事ができちゃうんだ、驚沢な話だろつ」

大村さんが豪快に笑い飛ばした後、場は静まり返った。

かつては一家四人、三家族で十二人の共同体が賑やかに機能していた。それが家族単位になつて、今は、透子さんと、松田さん、大村さんが各々で独り暮らししている。どうやら外に出た子どもも自らの暮らしに忙しく、あまり実家に帰つて来ないらしい。

「大村さんはなあ、すぐ酔っ払つて、縁側で寝転んでやなあ。子どもらが順番にちよっかいかけに行つて、子ども相手に本気で怒鳴つてなあ。立ち上がつて追い回そうとして、縁側から落っこちやうたやで」

「おいおい勘弁してくれよ。その話は臺まで持つていく約束だろつ」

大村さんが豪快に笑い飛ばした後、再び静寂に包まれた。

「……約束といえば、亡くなった柀さんのご主人との約束ですよ。さあ、作戦会議をしましょう」

私は一つ咳払いして本題に移した。とはいえ、日時は既に決まっているらしく、もともと計画があつてないようなところもあり、確認を要したのは、我々の集合時刻くらいのものだつた。

「それでは、十一月十五日の土曜日、夜九時半に柀宅に集合というところで」

そう言つて、私が腰を上げようとした時、松田さんが妙なことを言った。

「ワシらの共同体は解体してしもたんや。原因をつくつたんは透子さんや」

「さでないか、お悩みの解決に行くんだろつ。まるで復讐劇みたいに言うもんじゃない」

会社では大村さんが上司だったのだろつ、そういう言い方だった。

「あ、自治会長。クライマックスの曲染しみにしてますから」

私は、なんとなくお上手を言った。

「急にどうしたんだい。音響は必要ないんじゃないのかい、北島くん」

「えっ……いや、まあ」

今夜も、二十三時に同じ台詞が隣家から聞こえてくる。

打ち合わせの箇切れの悪きもあつて、身近な暮らしに潜む不気味な世界の入り口に立っているような気がした。ひよっとすると私は、彼らに利用されているのかもしれない、そう勘ぐるくらいに。

そして、十一月十五日の夜がやつてきた。

